



戦争は弱者を犠牲にする

金田茉莉ほか著(くみふる・1760円)

著者の金田氏は1945年3月10日の東京大空襲で家族を殺された。本書はあまり知られていない戦争孤児の「戦後」を伝えつつ、新しい戦争への警鐘を鳴らしている。

戦争孤児は差別や偏見を恐れて口をつぐみがちだ。著者もそうだったが、命に関わる病気を体験したことから孤児たちの体験を掘り起こすことを決意し、貴重な記録を残してきた。政府は元軍人軍属や遺族には援護や補償をしているが民間人は切り捨ててきた。2007年、当事者が国に謝罪と補償を求める集団訴訟の原告となり、法廷で国の不作為を鋭く

指摘もした。東京地裁、東京高裁で原告が敗訴。13年に最高裁の門前払いで敗訴が確定した。だが著者は被害の実態を伝え続ける。戦争孤児が何人いたのかなど、政府は戦争被害のまともな調査を行ってこなかった。

戦争を始める為政者は大抵、戦場の最前線には行かない。「『戦争になったら民間人がどうなるか』。隠されてきた裏の事実を知らなければ、また同じことが繰り返されるでしょう」と訴える。前川喜平・元文部科学事務次官との対談、著者と同じ戦争孤児であった海老名香葉子氏の寄稿も掲載されている。(栗)